武蔵野日曜聖書講筵

ペテロとコルネリオ
――使徒行伝第10章――

１９９１年7月7日
小池辰雄

コルネリオの救い　人種の差別は要らない　親鸞の信仰　聖霊のバプテスマ　十字架のバプテスマ

【使徒10】

1ここにカイザリヤにコルネリオという人あり、イタリヤ隊と称うる軍隊の百卒長なるが、2敬虔にして全家族とともに神を畏れ、かつ民に多くの施済をなし、常に神に祈れり。3或日の午後三時ごろ幻影のうちに神の使きたりて『コルネリオよ』と言うを明かに見たれば、4之に目をそそぎ怖れて言う『主よ、何事ぞ』御使いう『なんじの祈りと施済とは、神の前に上りて記念とせらる。5今ヨッパに人を遣してペテロと称うるシモンを招け、6彼は皮工シモンの家に宿る。その家は海辺にあり』7斯く語れる御使の去りし後、コルネリオ己が僕二人と従卒中の敬虔なる者一人とを呼び、8凡ての事を告げてヨッパに遣せり。

9明くる日かれらなお途中にあり、既に町に近づかんとする頃おい、ペテロ祈らんとて屋の上に登る、時は昼の十二時ごろなりき。10飢えて物欲しくなり、人の食を調うるほどに我を忘れし心地して、11天開け、器のくだるを見る、大いなる布のごとき物にして、四隅もて地に縋りくだされたり。12その中には諸種の四足のもの、地を匍うもの、空の鳥あり。13また声ありて言う『ペテロ、立ちて、屠りて食せよ』14ペテロ言う『主よ、可からじ、我いまだ潔からぬもの穢れたる物を食せし事なし』15声再びありて言う『神の潔め給いし物を、なんじ潔からずとすな』16かくの如きこと三度にして、器は直ちに天に上げられたり。

17ペテロその見し幻影の何の意なるか、心に惑うほどに、視よ、コルネリオより遣されたる人、シモンの家を尋ねて門の前に立ち、18訪いて、ペテロと称うるシモンの此処に宿るかを問う。19ペテロなお幻影に就きて打ち案じいたるに、御霊いい給う『視よ、三人なんじを尋ぬ。20起ちて下り疑わずして共に往け、彼らを遣したるは我なり』21ペテロ下りて、かの人たちに言う『視

よ、我は汝らの尋ぬる者なり、何の故ありて来るか』22かれら言う『義人にして神を畏れ、ユダヤの国人の中に令聞ある百卒長コルネリオ、聖なる御使より、汝を家に招きて、その語ることを聴けとの告を受けたり』23ここにペテロ彼らを迎え入れて宿らす。

明くる日たちて彼らと共に出でゆきしが、ヨッパの兄弟も数人ともに往けり。24明くる日カイザリヤに入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼び集めて彼らを待ちいたり。25ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』27かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集まれるを見て、ペテロ之に言う、28『なんじらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の国人と交りまた近づくことは、律法に適わぬ所なり、然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり。29この故に、われ招かるるや躊躇わずして来れり。然れば問う、汝らは何の故に我をまねきしか』30コルネリオ言う『われ四日前に我が家にて午後三時の祈をなし、此の時刻に至りしに、視よ、輝く衣を著たる人、わが前に立ちて、31「コルネリオよ、汝の祈は聴かれ、なんじの施済は神の前に憶えられたり。32人をヨッパに送りてペテロと称うるシモンを招け、かれは海辺なる皮工シモンの家に宿るなり」と云えり。33われ速かに人を汝に遣したるに、汝の来れるは忝けなし。いま我等はみな、主の汝に命じ給いし凡てのことを聴かんとて、神の前に在り』34ペテロ口を開きて言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、35何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。36神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。37即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。38これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、彼は徧くめぐりて善き事をおこない、凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。39我等はユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行い給いし諸般のことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。40神は之を三日めに甦えらせ、かつ明かに現したまえり。41然れど凡ての民にはあらで、神の預じめ選び給える証人、即ちイエスの死人の中より甦え給いし後、これと共に飲食せし我らに現し給いしなり。42イエスは己の生ける者と死にたる者との審判主に、神より定められしを証することと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じ給う。43彼につきては預言者たちも皆、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦を得べきことを証す』

44ペテロ尚(なお)これらの言を語りおる間に、聖霊、御言をきく凡ての者に降(くだ)りたもう。45ペテロと共に来りし割礼(かつれい)ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物(たまもの)のそそがれしに驚けり。46そは彼らが異言(いげん)をかたり、神を崇(あが)むるを聞きたるに因る。47ここにペテロ答えて言う『この人々われらの如く聖霊をうけたれば、誰か水を禁じて其のバプテスマを受くることを拒み得んや』48遂にイエス・キリストの御名(みな)によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請(こ)えり。

●コルネリオの救い

今日は使徒行伝の第10章。第7章では、ステパノの殉道でした。第8章では、ピリポの伝道でアフリカのエチオピアの人が回心され、第9章では、サウロがダマスコ途上でひっくり返された。ユダヤ人のチャンピョンが復活のキリストに福音の世界に入れられた最大の事件だ。それで今度は、第10章にきて、コルネリオというのはローマ人ですね、だから、ヨーロッパ人の救いということになるわけです。それぞれ、アフリカ、ユダヤ、ギリシヤというように、神の救いが展開していくわけです。

第10章は、まだペテロの働きですね。パウロは異邦人の伝道者ですが、ペテロもここでは、ギリシヤは異邦ですから、異邦の伝道もしているわけです。

1ここにカイザリヤにコルネリオという人あり、イタリヤ隊と称(とな)うる軍隊の百卒長(ひゃくそつちょう)なるが、2敬虔にして全家族とともに神を畏(おそ)れ、かつ民に多くの施済(ほどこし)をなし、常に神に祈れり。

これは珍しい人です。ちょっと類例がない。この「神を」というのは、もちろんはっきりと、キリストの神というわけでもなさそうだけれども、旧約聖書における神ですね。だから、「施済をして」というのは、ユダヤ人に対する施しです。そういう、非常に不思議なこと。この前もキリストに非常に褒められた百卒長がいましたが、今度もそういうわけです。

むしろ軍人には、非常にはっきりした魂がいる。その事はヒルティも、ゴルドン将軍について言ってます。軍人にはむしろ絶対服従、絶対信頼というような角度の、魂の非常にすっきりした人がいます。正直、私は軍隊にいましたから、知っています。阿南惟幾(あなみこれちか)なんていうのもそうです。戦争に敗れた時に、天皇陛下に申し訳ないといって、最初に自殺した。あの人は宗教・哲学も勉強していまして、幼年学校の校長の時に、私にいろいろ聞いたです。

3或日の午後三時ごろ幻影(まぼろし)のうちに神の使(つかい)きたりて『コルネリオよ』と言うを明かに見たれば、4之に目をそそぎ怖(おそ)れて言う『主よ、何事ぞ』御使(みつかい)いう『なんじの祈りと施済(ほどこし)とは、神の前に上りて記念とせらる。

非常に素晴らしい対話ですね。やはり、祈りのないところには、神との交わりは、もちろんないわけで、祈りは神との交通の大事な魂の姿ですから。

この前、親鸞の話をしましたね。親鸞が「南無阿弥陀仏」という――「如来」「アミッター」に対するところの祈り――念仏、その祈りも自分で祈っているのではない。祈らせられている。完全に他力の世界を、この前お話ししましたが。いわゆる、こちら側の熱心の祈りでなくて、上からの力で祈らざるを得ない祈り。これが本当の祈りだということ。

このコルネリオの祈りの姿もよかったんでしょう。だから、「神の前に記念とせらる」と言われた。

●人種の差別は要らない

5今ヨツパに人を遣してペテロと称うるシモンを招け、

そういう御使の言葉がひびいた。「ペテロ」というのは名前じゃないからね、キリストにつけられた号みたいなもの。

6彼は皮工シモンの家に宿る。その家は海辺にあり』7斯く語れる御使の去りし後、コルネリオ己が僕二人と従卒中の敬虔なる者一人とを呼び、8凡ての事を告げてヨツパに遣せり。

そういうように、御使のお示し通りにやったわけです。コルネリオは、要するにまだユダヤ教ですから。だけれども、パリサイではなくて非常に敬虔な愛の人です。

9明くる日かれらなお途中にあり、既に町に近づかんとする頃おい、ペテロ祈らんとて屋の上に登る、時は昼の十二時ごろなりき。10飢えて物欲しくなり、人の食を調うるほどに我を忘れし心地して、11天開け、器のくだるを見る、大いなる布のごとき物にして、四隅もて地に縋りくだされたり。12その中には諸種の四足のもの、地を匐うもの、空の鳥あり。13また声ありて言う『ペテロ、立ちて、屠りて食せよ』14ペテロ言う『主よ、可からじ、我いまだ潔からぬもの穢れたる物を食せし事なし』

これはレビ記の11章に食物の区別がある。

「2イスラエルの子孫に告げて言え地の諸の獣畜の中汝らが食うべき四足は是なり。3凡て獣畜の中蹄の分かれたる者すなわち蹄の全く分かれたる反芻者は汝等これ食うべし。4但し反芻者と蹄の分かれたる者の中汝等食うべからざる者は是なり即ち駱駝是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚れたる者なり。5山鼠……6兎……7豚……8汝等是等の者の肉を食うべからずまたその死体にさわるべからず是等は汝等には汚れたる者なり。9水にある諸の中汝等の食うべき者は是なり……13鳥の中に汝等が忌わしとすべき者は是なり……20また凡て羽翼のありて四爬にあるくところの昆蟲は汝等には忌わしき者なり。……」（レビ11・2…20）

そういうことをやっている。ところが、こういうものをキリストは破ってしまうわけだ。

だから、イエスは嫌われるに決まっているんですよ。

15声再びありて言う『神の潔め給いし物を、なんじ潔からずとすな』16かくの如きこと三度にして、器は直ちに天に上げられたり。

そんな区別は要らないんだ、神さまは全部潔めたと。これは大胆な言葉です。そういう幻を見た。ということは、これは動物の世界であるけれども、人間界でも同じだということの示しなんです。人種の差別は要らないということ。

17ペテロその見し幻影の何の意なるか、心に惑うほどに、視よ、コルネリオより遣されたる人、シモンの家を尋ねて門の前に立ち、18訪いて、ペテロと称うるシモンの此処に宿るかを問う。19ペテロなお幻影に就きて打案じいたるに、御霊いい給う『視よ、三人なんじを尋ぬ。20起ちて下り疑わずして共に往け、彼らを遣したるは我なり』21ペテロ下りて、かの人たちに言う『視よ、我は汝らの尋ぬる者なり、何の故ありて来るか』22かれら言う『義人にして神を畏れ、ユダヤの国人の中に令聞ある百卒長コルネリオ、聖なる御使より、汝を家に招きて、その語ることを聴けとの告を受けたり』23ここにペテロ彼らを迎え入れて宿らす。

ユダヤの歴史的なエホバの神を畏れている、それだから、義人であると。まっすぐな信仰があることを義人というわけです。

明くる日たちて彼らと共に出でゆきしが、ヨッパの兄弟も数人ともに往けり。24明くる日カイザリヤに入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼び集めて彼らを待ちいたり。25ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』27かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集まれるを見て、ペテロ之に言う、28『なんじらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の国人と交りまた近づくことは、律法に適わぬ所なり、然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり。

人間には、

「異邦人は救われない、汚れている、潔くない」

とかいうのは、とんでもない、そんなことはないんだ。

「ユダヤ人が他の国と交わってはいけないようなことが律法にあるけれども、そうじゃないんだ」

と。そのことは、先程の幻影で示された、暗示されたわけだ。それはそうですよ。ペンテコステの時には、もういろんな地方の人が救われたんだからね。これは本当の無差別、平等である。神の前には全部ただ、人である。相対的な、そういった区別、判断をやっているから、いつまでたっても本当の平和が来ないというわけだ。

29 **この故に、われ招かるるや躊躇わずして来れり。然れば問う、汝らは何の故に我をまねきしか』** 30 **コルネリオ言う『われ四日前に我が家にて午後三時の祈をなし、此の時刻に至りしに、視よ、輝く衣を著たる人、わが前に立ちて、** 31 **「コルネリオよ、汝の祈は聴かれ、なんじの施済は神の前に憶えられたり。** 32 **人をヨッパに送りてペテロと称うるシモンを招け、かれは海辺なる皮工シモンの家に宿るなり」と云えり。** 33 **われ速かに人を汝に遣したるに、汝の来れるは忝けなし。いま我等はみな、主の汝に命じ給いし凡てのことを聴かんとて、神の前に在り』**

この場合の「我等はみな主の」の「主」というのは、「主なる神の」という意味で、キリストを指しているわけじゃないようだな。

34 **ペテロ口を開きて言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、** 35 **何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。**

はっきりこれで分かったと。そのことはコルネリオ自身、お前自身が証明しているんだと、正に言わんとしているわけですね。パウロが言っている通り、

「異邦人も何も差別はない、そのことがはっきり分かった」

と。天から下りてきたところの、四つの支えをもった布のはなしです。

●親鸞の信仰

36 **神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。**

イスラエルばっかりじゃないんだけれどもさ、まずイスラエルだ。「平和の福音」の「平和」という言葉は、「平安」と「平和」と両方の意味を持っていると言っていいでしょう。立ての関係、神との関係が平安。人との関係が平和。「シャーローム」という言葉は両方の意味を――むしろ神との関係が始めの意味ですけれども――持っている。「平安・平和の福音」だ。

37 **即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。** 38 **これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、**

「言」とは、もちろんキリストの言です。「聖霊と能力」。聖霊はまず力を持っているから。聖霊が注がれればもう、力も愛も智慧も何でもある。「聖霊とその力」と言ったって構わない。

彼は徧くめぐりて善き事をおこない、凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。

「偕に」ばっかりじゃない。

「神これと偕にかつ中に」

というわけだ。

厳密な意味で「聖霊」は、キリストに現れたところの霊ですから。キリストという方が神から賜っているところの霊は、これは特別な霊です。キリスト抜きにして聖霊ということは言えない。「聖き霊」と、詩篇の51篇に出てくるけれども、旧約聖書で、

「聖き霊」「聖なる霊」

というのは二、三回しか出ていない。それはもう、キリストは絶対ですからね。

親鸞の信仰の在り方がもの凄いから、それを話したところが、

「そういう信仰でも救われるんですか？」

なんていう質問が出る。しかも、

「十字架の贖いによらなければ救いはない」

と言う。

「誰が救われるか」

ということは、これは神さまだけです、人間が規定すべきことではない。

ただ、我々の信仰の世界では、キリストの十字架を本当に受けとり、贖罪を本当に受けとる。これは、自分の自信でなくて、神さまが十字架により救いたもう。救いのことは、人間の側からどうのこうのと規定することはできない。ただ、確かさは、我々の信仰においては、キリストを受けとる時には、本当にその人が受けとっていれば、そこに確かさが来ているので、お互いに

「確かだ、確かでない」

とか、そういうことを議論する世界じゃない。もうこれは、何とも言えないね。説明はつかないです。

「たとえ弥陀の本願を受けて地獄に落ちたって一向差し支えない、存知せざるなり」

と親鸞は言ってますが、あれは素晴らしい言葉です。

「こちらの救いのための宗教じゃない。本願が成るためだ。本願が成ることが、こっちが地獄へ落ちる事なら、それでも結構でございます」

と。これだけの角度だからね、親鸞の『歎異鈔』の言葉はもの凄い。だから、

「神さまの本願の成るためには、自分は消えてしまってもよろしい」

ということと同じこと。そこまで魂が突き抜けていると、そういう世界は、客観的にいえば、完全に救われている世界です。

「私の信仰は義(ただ)しいから救われる」

なんて、そんなことを思ったら、とんでもない間違いです。

●聖霊のバプテスマ

十字架上のキリスト・イエスも、

「わが神、わが神、何ぞ我を棄ていたまいし」

と言った。凄い言葉です。

「なぜ、私をお棄てになったか」

と。非常に逆説的な言葉です。

39我等はユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行い給いし諸般（もろもろ）のことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。40神は之を三日めに甦（よみが）えらせ、かつ明かに現したまえり。41然れど凡ての民にはあらで、神の預（あらか）じめ選び給える証人、即ちイエスの死人の中より甦えり給いし後、これと共に飲食せし我らに現し給いしなり。

非常にはっきり言っているね。

「甦えった後に、一緒に飲食しました。キリストは魚を食べました。大変な人だ、幽霊じゃなかった」

とペテロははっきり言っている。みんなこれに、神学者は躓くんだよな。物語じゃない。ペテロはちゃんと証言しているんだ。ルカ伝の24章の終わりの方に出ています。ヨハネ伝にも出ていたかな。

「**来（きた）りて食せよ**」

とヨハネ伝21・12に書いてある。ルカ伝が一番はっきりしている。

42イエスは己の生ける者と死にたる者との審判主（さばきぬし）に、神より定められしを証することと、民どもに宣（の）べ伝うる事とを我らに命じ給う。43彼につきては預言者たちも皆、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦（ゆるし）を得べきことを証（あかし）す』

44ペテロ尚（なお）これらの言を語りおる間に、聖霊、御言をきく凡ての者に降（くだ）りたもう。45ペテロと共に来りし割礼（かつれい）ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物（たまもの）のそそがれしに驚けり。

「割礼」なんて問題じゃない。問題は聖霊のバプテスマだ。ただ、ペテロの言葉の中には「十字架」という言葉は出てこない。ただ、

「**木にかけて殺せり**」

という。「贖罪」という意味は、はっきりそこには出てないけれども。「罪の赦し」という言葉は出ているね。罪の赦しは、いわゆる本願じゃないです。本願の具体的な事実は十字架なんだから。そのことを一番はっきり言っているのは、何といっても、パウロです。

「**我らのために砕かれる**」

という、あのイザヤ書の言葉が十字架のことです、私に言わせれば。だから、私は

「砕けの神学」

なんて言いだした。単なる「傷つき、痛み」どころの騒ぎじゃない。親鸞が福音を聴いたら、キリスト教に変わったかも知れないね。

もう異邦人もユダヤ人もないという、本当に世界同胞の現実に福音は入れているのに、あいかわずユダヤ人は困ったものだね。中東の問題は大変だね。イスラム教、ユダヤ教の戦いみたいだ。結局そうだ。要するに本当の意味で福音の世界、キリストの世界ではないから。だから、パウロが、

「この頑くななユダヤ人が本当に砕けて福音を受けとるためには、私はキリストに棄てられてもいいんだ」

と、あのロマ書9章の言葉は、パウロの一番凄い、同胞のための祈りの言葉です。

「キリストに棄てられても彼らの救われんことを。それくらい俺も間違えていたんだ、その俺がひっくり返ったんだから」

と。ところが、相変わらずユダヤ人はひっくり返らない。

46**そは彼らが異言(いげん)をかたり、神を崇(あが)むるを聞きたるに因る。**

異言を語ったから聖霊が来ていると、そういうようにまたすぐ思ったらいかんですよ。異言もひとつの賜物で、「聖霊が降(くだ)る」ということは、そのために異言が出たか出なかったか、とは関係ない。

とにかく、このコルネリオとその一族の者たちが完全に救われてしまった。大変なもんだ。

●十字架のバプテスマ

47**ここにペテロ答えて言う『この人々われらの如く聖霊をうけたれば、誰か水を禁じて其のバプテスマを受くることを拒み得んや』**

聖霊を受けたから、もうそれでいいんだよ、水のことなんか。ここでも、相変わらず、水のことが書いてある。水のバプテスマ、水の中に浸ること、「浸礼」だね。その頃の、条件でもないけれども、言わず語らずのうちの条件になっていた。

48**遂にイエス・キリストの御名(みな)によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請(こ)えり。**

聖霊を受けたから、もう、バプテスマと言ったって、これは、悔改めのバプテスマをそこでもう一辺、逆にやるのかと。ちょっとここの所は、どうでもいいところですが、我々の考えから言えばね。無教会では、

「信ずればいい、バプテスマは要らない」

と言う。その「信ずればいい」が、今度は聖霊抜きの「信ずればいい」では、これまた困ったもんだ。観念信仰です。私も長いこと無教会にいたが、何か欠けていると思った。それは聖霊なんだ。

キリストのバプテスマは十字架だった。そうでしょ。

49**「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。**50**されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるる**

までは思い逼(せま)ること如何許(いかばかり)ぞや。」（ルカ12・49～50）

「火を投ぜんために来たんだが、火の前にバプテスマを受けなければならない。十字架に懸からなくてはいかん。贖罪だ。お前たちに贖罪の土台を与えて、それから、火を投ずる、聖霊を投ずる」

と。あのルカ伝12章の49、50節は非常に大事な言葉ですから。あれはもう本当に焦点みたいな言葉だ。

「もうこれだけだ。聖霊だけ。聖霊さえ与えればもう何も私は望まない」

と。こちらも、受けとった方も、

「もう何も要りません、聖霊だけで結構です」

ということなんですね。だけれども、

「我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思いせまること如何ばかりぞや」

と。素晴らしい言葉だね、このキリストの告白は。

「十字架と聖霊は絶対に離すことのできない焦点である」

ということを、このルカ伝12章の49、50節ほどはっきり示しているところはない。

こっち（水）のバプテスマはどうでもいいんだ、

「水を禁じてどうのこうの」

と。まぁ、いいや、その時の事だから。

「イエス・キリストの御名によりてバプテスマ」

は、既に話の中で聖霊が降ってしまったものだから、もう受けてしまっているんだ、本当はね。まぁ、一つの徴としてやったわけだ。

で、ペテロは今度またエルサレムに帰って、みんなに説明して、同じようなことを書いてある、第11章になるとね。

即ち、ローマ人のコルネリオを通して、その一族及び他の人たちに、聖霊が降ってしまった。彼自身が、ユダヤ教から福音に、キリスト道に変わった。非常に著しい所です、この使徒行伝第10章はね。

聖霊の働きの具体的な事は何といっても使徒行伝です。その中の最大のものは、パウロがひっくり返ったこと。それをいい加減にしているんだからね、ユダヤ人が。それからまた一般のキリスト教界が。無教会も。我々は、その意味において、事実をもって証しているところの使徒行伝が何と大事なものであるか、ということを知るわけです。

では、今日はここまで。